

新長田の復興

阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災は、一九九五年一月一十七日午前五時四六分に起こり、死者・行方不明者合わせて六四三七人を出し、その国内史上初めてとなる震度七を記録しました。また、震源に近い神戸市内の市街地は甚大な被害を受け、大規模な火災が起きました。その状況のため、ライフラインも被害を受けました。携帯ラジオを通じ、被害状況がつかぎと明らかになりました。各地で、家屋崩壊・火災、死者・行方不明者多数、高速道路崩壊、鉄道寸断、電線切断などさきまな所で、今まで見ていた景色は奪われていきました。また、この地震は、火事が一番多く、六四二二棟もの家が全焼しました。地震での死者以外にも、地震による仮設住宅の中での孤死も相次ぎました。

新長田の被害

新長田も地震の被害を大きく受けた。一瞬、新長田の来ていた町の色を奪い、今まで住んでいた町を数秒で破壊した。そこに襲ってくる多数の火、それは地震直後に十ヶ所の同時火災を起こし、東京ドーム約分の面積を奪い去っていき、そんな中私たちの高校も被害を受けました。

神戸野田高校

地震が起こり、教職員は数人ほどこ連絡が取れず、携帯電話などで生徒のご家族などに連絡を行った。我が校は、災害時避難指定場所ではなかったが、避難所は約五〇名の人で溢れかえった。しかし食料や毛布などいっまでも待つことも出来ませんでした。先生方が市役所に掛け合などいろいろな問題がありました。校舎内はほとんど崩壊・見るも無惨な状況でした。一週間たち、テレビや新聞などを通じ生徒に休校や登校などの連絡を行い、そのころには停電がほぼ解消し、いくつかの電車が復旧したおかげで生徒はその約一週間後に出席率八一・二％となります。しかし、二名の生徒の犠牲者が出たという事実があり、全員が無事で明日を迎えられたわけではありませんでした。

感じたこと

神戸野田高校の人たちの記録集を全部読みました。なんて私は幸せなんだろうと一人一人の話を読みながら涙しました。たった数秒で人の命を奪い、今でも、鉛のような記憶を残し続けている災害、生きている人がため現実にとつたことだと感じられない。話さない聞きたくないという思いがわかんない。ただ一つ今の命があり勉強して遊んで夢の為に邁進、どうでもいいことを話し、毎日家族や友達に会えることは奇跡のようない出来事なんだと。したくてもできない人が何千人もいることを先輩の話を見て感じた。あー死ぬまでよく使うが、そんなことを言っている自分に後悔している。災害を受けたことがないから先輩達の経験をしてないから感じるのだ。それが、なんて幸せだと感じなければならぬ。

インタビュー

「お茶の味萬」店長

伊東正和さん



被災して失ったもの

阪神淡路大震災発生直時から新長田の正商店街で茶屋営んでいた伊東さんは震災によって何もかも失ったと言った。伊東さんを含め商店街で仕事をし、生活していた人々は地震による建物・崩壊に加え神戸市長田はほぼ全体を襲った大火災により商店街の約り割が燃焼したため居住地と商業地を同時に失い生活の糧も家族や商店街の仲間を喪失も良いに確かめることができない非常に不安な状況だったと話す。火は発火点が低く、物が近くにあるだけで簡単に燃え移ったため、当時の建物の性質上、建物の塩化ビニルが燃えたとそれまで燃えていなかった部屋のカーテンなども燃え移ったため、火災が悪化していったのだと教えていただきました。商店街の中も海が近く、ホースで水を汲みできたため火を消し止めることができた南側の店に、それぞれの安否をメモ書き残したそうです。

避難所の生活

避難所での生活はいざという時に必要なのはそれぞれ違っても、お年寄りや赤ちゃんだけでも大差があります。またベッドを飼っていたりとなればまだ動物レールを持っていく人共同では暮らせないので、これまで個々で暮らしていた人たちが集団生活を送るというにはさまざまな問題を提起することになったと教えていただきました。このように生活する中でたくさんの方がさまざまなものを必要とする中で被災後一番にすきと言っても過言ではないのが物資の補給を確保することです。阪神淡路大震災では当時主要となっていた道路が崩壊や火災などの理由で通れないことが多かったと、これからくる災害に備えてのうから自分が被災する立場になった時が必要なのかを考え準備しておくべきだとのことです。伊東さんは商店街の人たちとも九年六月を仮設住宅で過ごしました。多くの人が集まるその場所とそれぞれの持つ常識や当たり前の通用しないため、ルールを作り全員で守るようになっていきました。

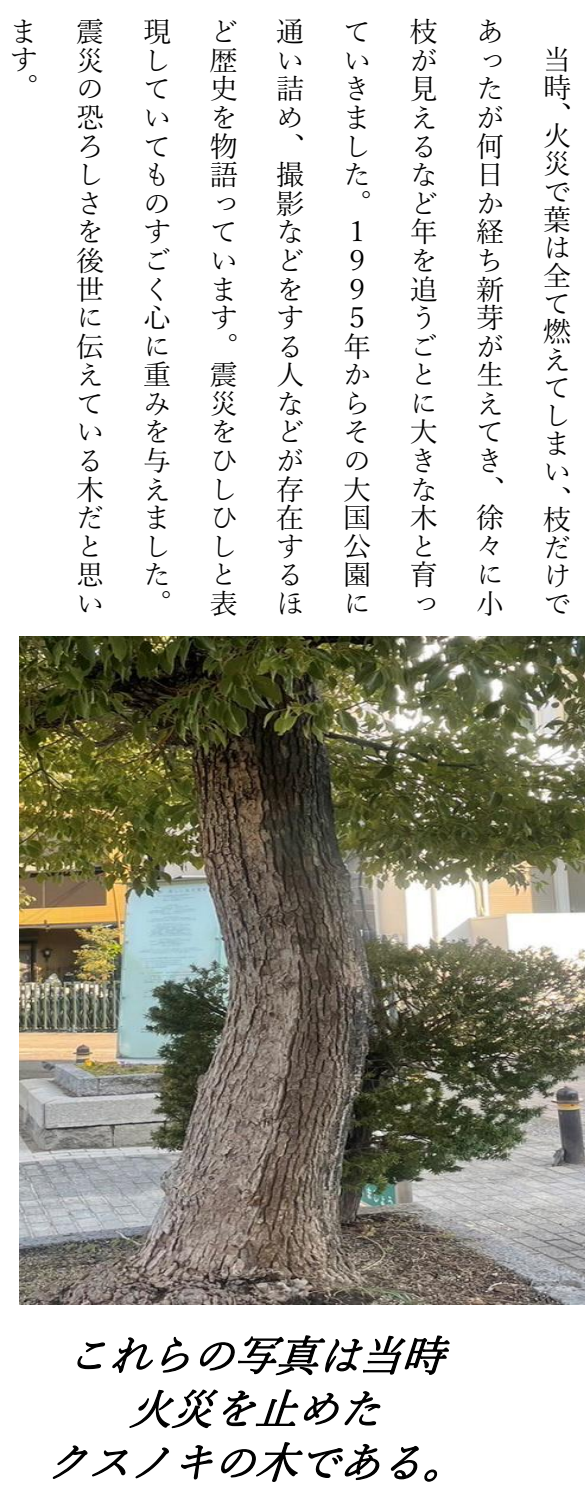
復興に向けた取り組み

震災前の活気ある商店街に戻すために伊東さんはデパート裏の仮設商店街店舗から構成される「パール商店街」を商店主さんたちと作り、町おこしをしました。被災し悲しみや不安に暮れる人たちの希望になるよう十五回のイベントを開催し人々に笑顔に集まれる場所を作りました。オープン当初は一日あたり六千五百人にも登る人が商店街を利用し四年たっても平日で四千人が利用する長田の拠点の一つとなりました。商店街とは例えばスーパーの店員とはできないような同じ環境で育ってきた人同市ならではの話ができる。そんな人々のつながりが強く温かい場所が被災した方々の希望になるようにパール商店街の運営に携わった伊東さんはおっしゃっていました。誰でも気軽に訪れられて安心できるそんな場所だったのだからと話を伺っていて思いました。



大公園

大公園はJR西日本鷹取駅から東に200メートルの位置に存在する、菱形の公園です。阪神・淡路大震災による新長田全体で起こった大火災は、東側から西へ向かって燃え移ったが水分を含んだ樹木が水の壁になったことに加えて、オーンスペースが延焼を食い止めたためこの公園で止まりました。そのおかげで助かったところもあります。救助活動の拠点になり、当時、大きく貢献した公園です。先ほど話した樹木は地震に耐え、まだ生き続けています。



これらの写真は当時火災を止めたクスノキの木である。



上の写真は新長田の復興の歴史が書かれている。古くから提示されているため、赤みがかった。

これから備えた防災

伊東さんは自身が阪神淡路大震災を経験してからさまざまな防災の活動や東日本大震災などの日本各地で発生した災害の復興支援などに取り組まれています。東日本大震災発生には募金活動などにより集めた支援金で北陸に「ED」を寄付されたそうです。北陸は日本の中でも緯度が高く冬だったため日が沈むのも早く、暗くなってみんなが安心して道を通れたら文えなれたらという伊東さんは考えを寄付したそうです。伊東さんのように以前に同じような被害を被った方々の支援はそれ以外の人員比の確なものになるかもしれませんが、災害を経験していない人でも自分が当事者になった時に何があれば心の支えになるのかを考えることが大切だとわかりました。

伝えたいこと

一人ではなし得ないことも数多くなければならぬ。欠落するところがなく、完璧にちがいない輪が出来上がる。例えば一人が八人を守るとしたら八人それぞれが八人を守るように一人一人が八人の人間を助けたり救おうとすると大変で確実性が薄れるけれど、少しずつそれぞれが八人を守るだけでその助け合いは全体に行き渡り始め。それそれが少しの支えを持ち寄り協力することが人と人とのつながり。いつまでも変わらない関係が出来上がる。と伊東さんはおっしゃっていました。ルールや備えがあれば何か起きた時にいち早く的確に行動することができる。伊東さんに教えていただいた自分がその立場になった時として欲しいかを日頃から考え用意することを意識して、日々を過ごしていきたいと思います。

人と防災未来センター

神戸市中央区にある、人と防災未来センターは阪神・淡路大震災の経験を語り継ぎ、その教訓を未来に生かすことを目標に掲げ施設です。私たちが個人単位でできる災害への備えや、地震が起きた時のシミュレーション体験などをさせていただきます。



普段からできる地震への備え

動物をよく観察すること。動物の中には人間に比べて音、電気、電磁波、匂いなどに対する感知力が格段に優れているものがあります。例を挙げると地震の前には急に遠吠えしたり、猫が外へ飛び出そうとしたり、深海魚が浜辺に打ち上げられたりしていたりすること、地震前は明らかに異なる行動です。だから、自身のペットや近所に住む野良猫を毎日よく観察すること、地震前の変化を察知することができます。

非常用持ち出しリュックを各家庭に一つ



インタビュー 阪神・淡路大震災

神戸野田高等学校 先生方

神戸野田高等学校の先生方にインタビューしてきました。

●当時10代前半の男性

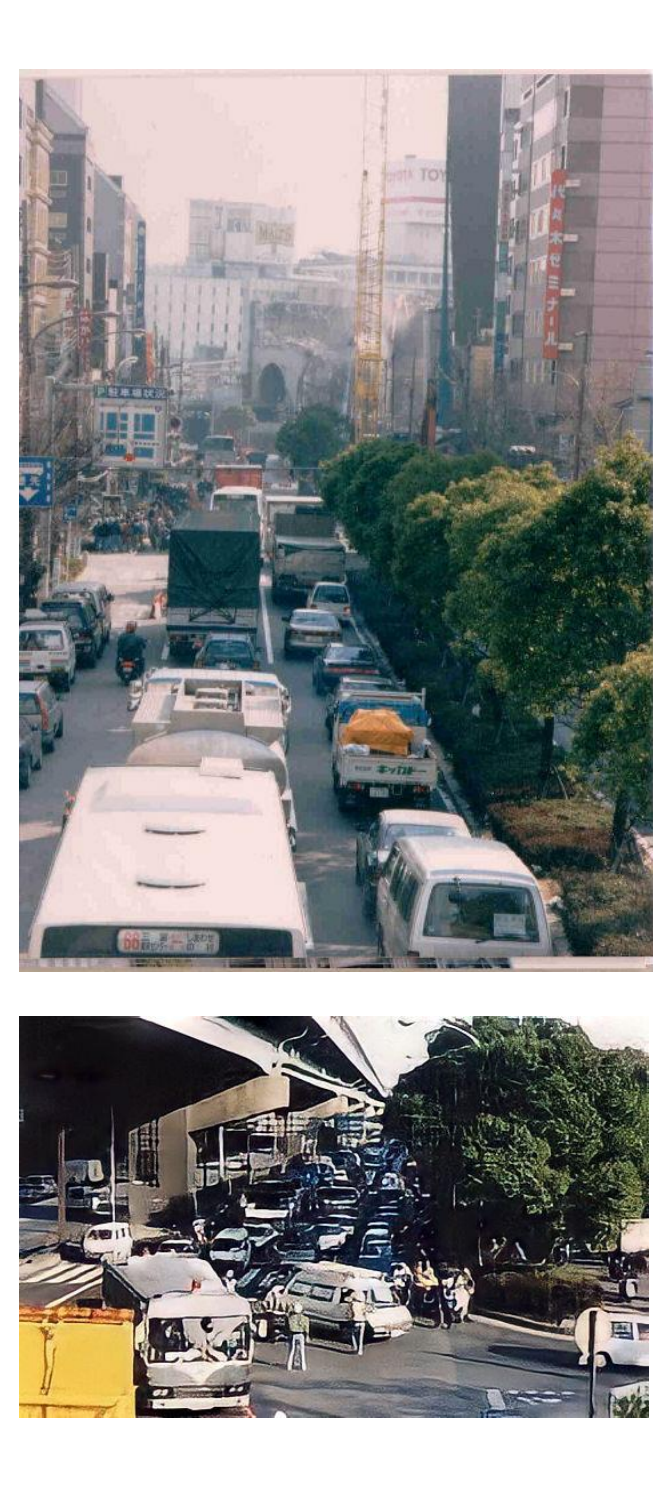
家の被害が大きかったので避難所に行っていますが、家が半壊してしまいたいことがあって、一緒に生活したい。当時、私が通っていた小学校も避難所となり、そこに来ている子どもたちと遊び交流することができたので、震災による不安を少し緩和することもできました。

●当時20代後半の女性

住んでいたマンションの一部が損壊してしまい、水や電気は使えませんでした。生活できたので避難所には行きませんでした。妊娠8ヶ月の妊婦だったので、産休をとって手伝えなかつたけれど、神戸野田高等学校も自然と避難所になっていました。

●当時20代後半の男性

家の被害が大きかったので、神戸大学の避難所に行きました。布団などの衣服で眠れるようなものはありませんでしたが、羽毛パジャマや枕のかわりを持参したかばんなどで睡眠や休息を取ることができたので、生きていくというこのありがたさから避難所での生活に不便はなく、むしろ人の温かさを知ることができた。良い生活でした。特に印象に残ったことは、避難所に盲目のマッサージ師の方が避難してきて、無償でマッサージをしてもらったことです。不便を感じたのは、通勤での交通面でした。電車が動いておらず、バスも渋滞で歩く方が速かったので2時間半かけていました。



●当時30代前半の男性

地震があつたことで私と子どもが寝ていた三段ベッドの一番上の段が二段目に落下してしまいましたが、私は子どもと一緒に一段目で寝ていたので、無事に逃げ出すことが出来ました。私自身も一緒に住んでいた家が半壊したので、布団を持って避難所に避難しました。しかし、無事にベッドから逃げ出すと床には住んでいた家が半壊したので、布団を持って避難所に避難しました。避難所での生活は約二週間ほどでした。避難所には震

防災シミュレーションゲーム

「クロスロード」

以前、学校で開催された防災セミナーに参加した時に「クロスロード」というゲームをはじめて体験してみ、ゲームを進めていく中で自分とは違う意見や考え、着目する点などを知ることが出来て自分一人では思いつかなかった考一方が生まれる一つの物語する見方の幅が広がったので、よりたくさんの人にクロスロードを通して災害について考えてほしいと思い紹介しました。

クロスロードとは

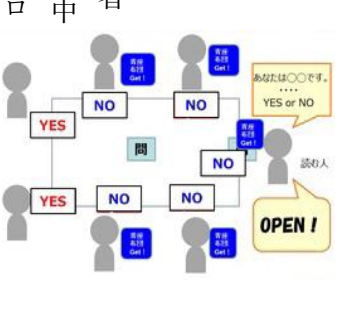
「クロスロード」とは、阪神・淡路大震災で、災害対応にあたった神戸市職員へのインタビューをもとに作成された、ゲーム形式の防災教材です。「クロスロード」は、「岐路」や「分かれ道」のことで、そこから転じて重要な決断を意味しています。「神戸市大震災犠牲者特別プロジェクト」（文部科学省）の一環として開発された「ブレイヤー」は、カードを選んで何らかの犠牲を払わなければいけないようなシチュエーションが多数あるような問題を自分の理由で考え、苦悩の末に「YES」か「NO」か、「一だけを選び、理由を友人や家族で話し合います。また、その人が「YES」または「NO」を選んで理由を聞くことで、多くの価値観や視点に出会うことができます。また、自主防災会などでは、地域独自の問題を作ったブレイクアウトの場にもなるでしょう。クロスロードは、災害を自分の身に引き寄せると同時に、他者のさまざまな考えを知ることが出来る優れたゲームです。ただし、「クロスロード」をするにあたって重要なことは予め定められた正解がないということです。「クロスロード」は災害時の正解を、寛容なものではなく、「あちらを立てればこちらが立たず」、しかも、様々な考え方を考える人がいるが、それでも結論を出して事を先に進めなければならぬ」を防災の本質として捉えています。その上で、多くの人が受け入れることのできる結論を引き出し、実行していくための作業を、いざというときになつてからではなく、今のうちから訓練しておくというのが「クロスロード」です。

クロスロードの進め方

- ①友人や家族などで2人以上の複数人でグループを組む
- ②問題カードを読み、それに対して各々が「YES」か「NO」を決め、「YES」「NO」カードを裏返してテーブルに置く
- ③裏返して置いた「YES」「NO」のカードをオープンする
- ④各々が「YES」「NO」を選んだ理由を話し合う
- ⑤次の問題カードへ

オリジナルクロスロード

これまで授業を通して震災について学習している中で、高校として、同年代の若者に災害の恐ろしさや防災の大切さをどのように伝える事ができるかを考えました。その中で、私たちが日々生活する新長田の被害や復興をモデルケースにして、オリジナルのクロスロード問題を作成し、同年代に向け実施する事を考え付きました。以下に、私たちが考えた問題の一部を記します。



災害を知った全国のボランティアの方々から食べ物や毛布などの物資が届いたり、自身の大学時代の先輩が手伝いに来てくださったので、とてもありがたくなり不便を感じたことはありませんでした。

●当時20代後半の女性

家の被害は酷くなったけれど、一人暮らしで不安だったので、近くに住んでいたいとこの家に避難しました。時間が経つてから当時から勤務していた神戸野田高等学校に出勤しました。学校の校舎は壊れていましたが、校舎内はまだまだ大丈夫になっていました。神戸野田高等学校は私立高等学校であるので避難所に指定されていなかったけれど、当時は自然と避難所になっており、約500人の方々が避難しにきていました。避難所となっていた体育館には床、面には布団が敷かれており、ボランティアの方々で常駐する水の本部などがありました。体育館に来た頃は、電気が復旧していましたが、水やガスはまだ通っておらず、水は手洗い用や飲料用などとにかく沢山の量が必要でした。水の確保に困っていた頃は自衛隊の方々が道路に常駐して給水タンクから避難所に水を分けてくださりとても助かりました。



これらのインタビューを経て、悲しみや不安に暮れる中でも明るい未来を指し指して一歩、歩みを進めていく。とする被災者の方々や支援してくださる方々の強い意志に圧倒されました。また震災で被害を受けた方々から、出てきた前のごきげん、現状に不便に感じているというようなどもありました。むしろお互いが自分ができることを探し助け合う過程の中で人の温かさを感じることができた場面が沢山あったことを知り、災害時だけでなく日常から人を気遣い合う心は大切だと改めて実感しました。震災を経験していない私たちに求められるもの、それは沢山あり、どれだけ備えても被災した時その備えが十分であると言えないではないでいう未来に備えずに進み続ける精神を持ち、どのような予測不能な事態にも立ち寄りて対処できる人間になりたいと感じます。

感想

問題カード① 問題… あなたは商店街に買い物にきていました。商店街で自分の周辺で火事が起きて、目の前まで火が近づいています。すぐに逃げなければいけない状況です。しかし、目の前で倒れている子どもがいます。YES 助ける / NO 助けない YESの意見 助けを求めている人を見逃ごせないから。避難をしたことに罪悪感を感じるから。周囲に人がいるだろうから一緒に助けて逃げてもらう。NOの意見 火が近づいてきている状況で子どもを連れて逃げるのは自分も死んでしまうリスクがある。助けたとしても2人とも火の中から逃げ切れるとは思えないから。やっぱり自分の命が一番優先すべきものだから。

問題カード② 問題…被災後避難所で生活しています。配給の時間になり並んでいますがあなたの子供が割り込んでしまいます。あなたはお腹が空いていて、後ろに並んでいる人でもたくさんいます。子供に後ろへまわってほしいです。YES 注意する / NO 注意しない YESの意見 少なくとも少しの間はみんな共同で生活するから見逃さずには注意して全員が平等に過ごせるようにするべきだから一人の子が守るとしたら次の配給の時に真似してする子が現れる恐れがあるから。被災の時でもくても順番に並ぶ事は大事だから。NOの意見 子供は大人よりよく育つために後ろの人に許可をもらって並ばせておく。自分はお腹が空いていても子供の方がしんどいと思うから、笑顔で順番を譲る。ただではお年寄りの方がやっぱ心が弱いから配給くらい自由にならせてあげたい。

編集後記

この新聞は、震災を経験された方々をうけていない方も震災後の町がどのようにして復興していくのか、防災とあつたことのない方々が必要であるかを改めて学んでいただきたいと思います。この新聞を制作するにあたり、お茶の味萬の伊東さんや神戸野田高等学校の先生方など沢山の皆様から協力いただきました。お茶の味萬の店長である伊東さんをお訪ねした際には、温かい笑顔で出迎えてくださり、話を詳しく教えてくださいました。私たちのインタビューにわざわざ時間を割いていただいた本音に感謝しています。インタビューを経て、震災を経験された方々に比べ、生まれてから今まで普通の生活を毎日送ることができていることに感謝の気持ちを持たずに生活していきたくないと思いました。現在も、様々な理由で普通と呼ばれるような生活を送ることのない方々には世界中にいらっしゃいます。そんな方々の暮らしが少しでも良くなるように、今回新聞制作にあたり色々調査したように、自分たちができることを探していきたいと思います。